

北海道函館市における観光の現況と課題

Current status and future issues on Tourism in Hakodate-shi, Hokkaido

助重雄久・石場清佳・金子日都美・坂口詩織・柴田有史・
鈴木有生・高田有紀・平野優美・向口和幸

SUKESHIGE Takehisa, ISHIBA Sayaka, KANEKO Hitomi, SAKAGUCHI Shiori, SHIBATA Yuji,
SUZUKI Yuki, TAKATA Yukino, HIRANO Yumi, MUKAIGUCHI Kazuyuki

本研究では、北海道新幹線開業前における函館市の観光の現況を観光客へのアンケート調査をもとに分析した結果、①東北地方からは比較的多くの観光客が鉄道で来訪していること、②道外から飛行機で来る観光客の86.7%が三大都市圏から来訪していること、③観光客が狭い範囲にある有名観光地に集中し、それらを短時間で周遊するため滞在日数が伸びないこと、などが明らかになった。これらの結果をふまえて、1)新幹線開業後は東北在住者や他地域から東北に来る観光客の取り込みを図ること、2)観光需要が高い地域と函館とをLCCやリージョナル・ジェット等で結ぶ航空路線の開設を促すこと、3)歴史ある街並みを徒歩で散策してもらうコースや、函館をベースにして松前、江差、恵山岬などを周遊する広域観光コースを確立し観光客に提案すること、の三点を観光振興に向けた方策として提案した。

キーワード：函館市、観光、北海道新幹線

I はじめに

わが国では、2010年の東北新幹線の八戸―新青森間の開業以降、九州新幹線(鹿児島ルート)の博多―新八代間(2011年)、北陸新幹線長野―金沢間(2015年)が相次いで開業した。これらの新規開業区間は、沿線に人口100万以上の都市がある既存の新幹線に比べて人口が希薄なうえに、高齢化等によって人口減少が進む地域と考えられる。このため、沿線住民による利用の大きな伸びは見込めず、観光需要の掘り起こしを図ることが健全な経営を維持するうえで重要なカギとなる。

2016年3月26日に新青森―新函館北斗間が開業する北海道新幹線は、近年開業した新幹線以上に経営環境が厳しい。東京―新函館北斗間は当初3時間台で結ぶことを計画していたが、青函トンネル内での貨物列車とのすれ違いが障害となり、開業時は最速4時間02分(函館駅までは4時間29分)にとどまった。運賃面でも航空各社の早期購入割引運賃に比べると割高となっており、近年開通した他の新幹線に比べると競争力が弱いのは否めない。

とはいえ北海道新幹線の開業は、観光客の伸び悩みや中心市街地の衰退に悩む函館市にとって、観光関連産業の活性化を図る絶好の機会であり、市民も大きな期待を寄せている。そこで本研究

では、北海道新幹線開業前における観光の現況を、函館市を訪れた観光客への対面式アンケート調査をもとに把握、分析する。さらに、分析結果をもとに函館観光の課題を明らかにし、新幹線開業後の観光振興に向けた方策を提案する。

II 函館市および周辺の地域概要

函館市は北海道の南部、渡島半島の南東部に位置しており、面積は677.83 km²(2014年10月1日時点)である。東・南・北の三方は太平洋と津軽海峡に囲まれ、西は北斗市・七飯町・鹿部町と接している¹⁾。

函館市は三方を海に囲まれているうえに、対馬暖流の影響も受けている。このため海洋性の気候を呈しており、北海道のなかでも比較的温暖で降雪量が少ない。1981～2010年の間の年平均気温は9.1℃で、札幌8.9℃、旭川6.9℃、釧路6.2℃に比べて高い。

函館市の発展の歴史には海と港が欠かせない。1859年(安政6)には、横浜、長崎とともに日本国内最初の貿易港として開港し、運上所が設置され、早くから西洋文化の影響を受けながら南北北海道の中心都市として発展してきた。西洋文化の影響を受けた建物や町並みは、今でも市内各所で見ることができる。また、水産資源にも恵まれている。とりわけイカは1989年に「市の魚」に選ばれ、イカの刺身やイカ焼き等は函館市を代表する味覚の一つになっている。また、朝廷や将軍家にも奉納され「献上昆布」と称される南茅部産の真昆布や、活メによる品質の高さに定評がある「戸井マグロ」も特産物として知られている。

函館市の人口は1980年の345,165人をピークとして減少が続いている。2015年には266,117人となり、1980年に比べて22.9%も減少した²⁾。

産業別就業者数(2010年)は、第1次産業4,343人、第2次産業20,184人、第3次産業89,051人であった。第3次産業就業者の割合は1990年には72.0%であったが、2010年には78.4%に上昇した。第3次産業のなかでもっとも就業者が多いのは卸売・小売業の26,218人であり、観光関連産業が含まれる宿泊業・飲食サービス業は9,158人、生活関連サービス業・娯楽業は5,332人であった³⁾。

函館市では全国の地方都市と同様に中心市街地の商業衰退が大きな問題となっている。とくに2004～2010年の6年間においては中心市街地の空き地面積が倍増した⁴⁾。空き地が増えた分、函館山から見る夜景も暗くなったという声も聞かれる。また、かつてはもっとも賑わっていた函館駅前・大門地区の歩行者通行量(休日)は、1991～2012年の間で72.5%減少した⁵⁾。

III 函館市および周辺の観光の概況

1. 函館市と周辺の主要観光地

函館市とその周辺にある主な観光地は、以下のとおりである。

1) 函館山

函館市街地の南西に位置する函館山(標高334m)は、市街地がある砂州で渡島半島とつながった陸繋島である。ミシュランのガイドブックでも三つ星の評価を受けており、函館市の象徴にもな

っている。函館山山頂から見た函館市街の夜景は、神戸の摩耶山、長崎の稲佐山とともに「日本三大夜景」と称せられている。山頂へはロープウェイや路線バスが運行されているほか、定期観光バスやツアーバスも必ず立ち寄る観光スポットとなっている。また、山麓からの登山道も整備されている。

2) 元町教会群

函館山山麓に位置する元町には、ハリストス正教会や聖ヨハネ教会、カトリック元町教会がある。ハリストス正教会は、ロシア主教ニコライによって伝導され、ロシアの領事館と礼拝堂を兼ねていた。ロシア風ビザンチン様式の建物である⁶⁾。函館港をバックに写真を撮ることができるため、絶好の撮影スポットにもなっている。

3) 旧函館公会堂

函館港を見下ろす高台に1910年(明治43)に建てられた、左右対称のコロニアルスタイルの公会堂である⁷⁾。基坂の下からもイエローとブルーグレーに彩られた華麗な姿を見上げることができることから、元町のランドマークにもなっている。1911年(明治44)には、大正天皇が皇太子殿下として行啓された際の宿舎として使用された。1974年には国の重要文化財に指定された。

4) 金森赤レンガ倉庫

金森合名会社(現・金森商船株式会社)が1887年(明治20)に営業倉庫業に乗り出し、海運業の隆盛とともに多くの倉庫を増設した。1907年(明治40)には大火によって倉庫が焼失したが、1909年(明治42)には再建され、現在の金森倉庫が誕生した⁸⁾。

第二次世界大戦後になると、海運業の変化や北洋漁業の縮小等によって倉庫業はかつての勢いを失った。一方で、建造物としての金森倉庫の価値に注目が集まるようになり、1988年には倉庫を改装し、クラシックホール、多目的ホール、ビヤホール等がある「函館ヒストリープラザ」が開業した。さらに1994年には2棟の倉庫を改装し「金森洋物館」、2003年には日本郵船より譲渡された「BAYはこだて」も含め、「金森赤レンガ倉庫」と総称するようになった。現在では函館山、元町教会群、函館朝市とともに、函館を訪れる観光客の多くが訪れる人気観光スポットとなっており、ウォーターフロントのシンボルにもなっている。

5) 函館朝市

第2次世界大戦が終結した1945年(昭和20)に、函館駅前広場の隅で、函館周辺の農業生産者の一部が野菜の立ち売りを始めたのが始まりであった。当初は闇市の一部とみなされ、場所も転々としていたが、1956年(昭和31)に若松町の現在地に移転した。現在では3haの敷地に約280軒もの店舗があり、年間180~200万人(推定)の来場者で賑わう⁹⁾。販売品目は塩干物、珍味加工品、青果、鮮魚、衣料品、米、生花、日用雑貨等バラエティに富んでおり、多くの観光客がみやげ物を購入したり、ウニ、イクラ等を載せた丼物や三平汁等を食べたりしている光景がみられる。

6) 外国人墓地

函館には、貿易港となった後に多くの外国人が居住していたが、なかには故国に帰れないまま函館の地で亡くなった人々もいた。これらの人々が眠っているのが外国人墓地である。アメリカ人水兵、プロテスタント、カトリック、ロシア人、中国人を埋葬した墓地があり、これらを総じて外国人墓地と称している¹⁰⁾。

7) 五稜郭公園

五稜郭は1866年(慶応2)に北方防備のためにフランスの築城方式を採り入れて造られた日本初の星型要塞で、国の特別史跡に登録されている。函館戦争の舞台となったことでも有名である。春はソメイヨシノが咲き誇る花見の名所にもなっている¹¹⁾。公園内には当時の姿に復元された奉行所、遊歩道などが見られる。また、公園に隣接する五稜郭タワーからは、五稜郭の全容が見渡せるだけでなく、函館市街や函館山、太平洋、津軽海峡を一望することができる。冬期にはイルミネーションを行うなど、季節ごとのイベントにも取り組んでいる。

8) 湯の川温泉

函館市郊外に位置する道内有数の温泉郷である。1885年(明治18)に石川藤助が100度以上毎分140リットルの温泉を掘り当て、翌年に湯治場を開業して以降、旅館や料理店、商店などが建ち並び賑わいをみせてきた¹²⁾。温泉街に隣接する根崎海岸は展望が素晴らしく、毎年8月には湯の川温泉花火大会が開催されている。

近年では函館市の年間観光客の5割弱にあたる約130万人が湯の川温泉に宿泊している¹³⁾。函館空港から函館市街地に向かうルート上にあり、空港からは車で5分、市街地からは路面電車でも行くことができる。

9) 大沼国定公園

函館市に隣接する七飯町の北部に位置する国定公園で、渡島駒ヶ岳と山麓にある大沼、小沼が含まれる。大沼の散策路からは沼の背後に渡島駒ヶ岳を見ることができる。また、白鳥やカモなどの鳥類や、シラカバ、イタヤカエデなどの林が独特の自然景観を形成している。1915年(大正4)には、実業之日本社主催の投票で三保の松原(静岡県)、耶馬溪(大分県)とともに「新日本三景」に選定された。

2. 入込観光客数の動向

函館市の年度別入込観光客数(推計)は高度経済成長期に急増し、1973年には298.0万人となった(図1)¹⁴⁾。高度経済成長が終焉を迎えると入込観光客数は一旦減少し、1975年以降の10年間は250万人前後で推移した。

1986~1987年度は、青函トンネルの開通で廃止となる青函連絡船の「お別れ乗船」ブームによって入込観光客数が再び増加し始め、1987年度には342.3万人と初めて300万人台に達した。1988年3月13日には青函トンネルが開通したことに加え、バブル景気に突入したことから、入込観光客数は急激に増加し、1992年度には506.6万人に達した。

1993年度以降はバブル景気崩壊や2000年の有珠山噴火で一時的に400万人台に落ち込んだ年度があったものの、2004年度まで500万人台で推移し、1998年度には過去最高の539.2万人に達した。しかし2005年度以降は減少傾向となり、リーマンショック以降の不景気の影響を受けた2009年度には433.2万人、東日本大震災の影響を受けた2011年度には410.8万人となった。2012年度以降は円安による訪日外国人客数の増加もあって、再び上昇傾向に転じ2014年度には484.0万人で、2005年度とほぼ同等の水準まで回復した。

月別では、例年8月にもっとも多く多くの観光客が来訪している。8月に観光客が多く訪れる要因としては、学校の夏休みであることに加え、猛暑となりやすい他の地方に比べ過ごしやすいこと



図1 観光入込客数の推移(1955-2013年)

(函館市「来函観光入込客数推計」をもとに作成)

が考えられる。

2014年度の交通機関別入込客数は、バスが211.7万人(構成比43.7%)、JR津軽海峡線が51.8万人(10.7%)、函館本線が47.9万人(9.9%)、乗用車が81.2万人(16.8%)、航空機65.3万人(13.5%)、船舶が26.2万人(5.4%)であった¹⁵⁾。また、2014年度の外国人観光客入込数は345,954人で、国・地域別では台湾228,774人、中国50,772人、香港12,131人、韓国10,437人、シンガポール10,374人、タイ10,159人、マレーシア5,697人、インドネシア2,467人、その他15,137人で、全体では前年度比120.0%増となった¹⁶⁾。

IV 観光動向調査とその結果

1. 調査方法

本研究では、函館市へのアクセスや函館市周辺における観光行動を実証的に把握するため、2015年9月14日～15日に観光客200人に対面式アンケートを用いた観光動向調査を実施した。調査対象者は、函館市内の主要観光地(金森赤レンガ倉庫・五稜郭・函館朝市・元町教会群周辺・函館駅周辺)を散策していた観光客(北海道内からの観光客も含む)から無作為に選び、調査票の質問項目に基づいて調査者が対象者(回答者)に直接質問した。質問項目は表1に示したとおりである。

2. 調査結果

1) 回答者の基本属性(性別・男女・同伴者等)

回答者の男女別内訳は、男性98人(49.0%)、女性100人(50.0%)で、この他にグループ等で複数の男女が回答したものが2組(1.0%)あった。この2組については、以下特記のないかぎり1組を

表1 質問項目

函館市における観光行動に関する調査票

調査日：9月 日 曜日 調査者（氏名： ）

1.お住まいはどちらですか？

a. 道内（市町村名： ） b. 道外（都府県名： ） c. 国外（国名： ）

2.どなたと何人で来られましたか？（人数にはあなたも含みます）

a. ひとり b. 家族（ ）人 c. 夫婦・カップル d. 友人（ ）人
e. グループ・団体等（ ）人

3.出発地から函館までは、どんな交通手段を利用して来られましたか？複数の交通手段を利用した場合は、例にならって★の右の [] 内に記入してください。

a. 鉄道 b. 飛行機 c. 乗合高速バス d. 自家用車 e. レンタカー f. 観光バス（団体貸切）
g. 観光バス（パックツアー） h. バイク i. 船 j. その他 []

★ []

（例）東京—d—仙台—i—苫小牧—d—函館

4.函館近辺の観光地間はどんな交通手段で移動します(しました)か？**複数回答可**

a. 市電 b. 路線バス c. JR d. 自家用車 e. レンタカー f. バイク g. 自転車
h. ツアーバス i. 定期観光バス（市内周遊等） j. その他 []

5.函館市へ来たのは何回目ですか？

a. 初めて b. 2回目 c. 3回目 d. 4回以上

6.今回の旅で函館近辺で訪れた、または訪れる予定の観光地はどこですか？**複数回答可**

a. 函館朝市 b. 函館山 c. 赤レンガ倉庫群 d. 外国人墓地 e. 旧函館公会堂
f. ハリストス正教会等（元町周辺） g. 啄木小公園 h. 五稜郭公園 i. 五稜郭タワー
j. 香雪園 k. 湯の川温泉 l. 大沼公園 m. その他 []

7.北海道では何泊しますか？函館市内での泊数、他地域での泊数に分けてお答えください。

函館市内（ ）泊 他地域（ ）泊

8.市内で宿泊される方に伺います。宿の情報はどのように入手しましたか？**複数回答可**

a. 旅行予約サイト（楽天・じゃらん等） b. 宿のホームページ c. 宿の SNS やブログ
d. パンフレット e. 旅行雑誌（るるぶ、まっぷる等） f. 観光案内所 g. 口コミや知人の紹介
h. 宿泊客の SNS やブログ i. その他 []

9.市内で宿泊される方に伺います。宿はどんな手段で予約しましたか？**ひとつだけ○**

a. 電話で直接 b. 観光協会の紹介 c. 旅行会社の窓口 d. 宿のホームページ
e. 旅行予約サイト f. その他 []

10.函館市に関する感想・要望があれば書いて下さい（観光地、交通の利便性等）。

[]

代表して回答された方の

[性別] a. 男 b. 女

[年齢] a. 20歳未満 b. 20歳代 c. 30歳代 d. 40歳代 e. 50歳代 f. 60歳代以上

ご回答いただきありがとうございます。

1人分として扱う。

年齢別内訳は、20歳未満が19人(9.5%)、20歳代が58人(29.0%)、30歳代が29人(14.5%)、40歳代が32人(16.0%)、50歳代が24人(12.0%)、60歳代以上が38人(19.0%)であった。調査実施日が大学の夏季休暇中であったことから20歳代がもっとも多かったが、全体的にみると、どの世代もまんべんなく訪れていた。

同伴者は、ひとり(同伴者なし)が19人(9.5%)、家族が53人(26.5%)、夫婦・カップルが60人(30.0%)、友人が46人(23.0%)、グループ・団体が22人(11.0%)であった。同伴者についても特定の属性への偏りはなく、一人旅から団体旅行まで多種多様な旅行形態で訪れているといえる。

2) 居住地

回答者の居住地については、同一グループが複数の都道府県から来訪していた場合、それぞれの都道府県を1人分とみなした。この結果、回答者のべ人数は207人となった。その内訳をみると、東京都が41人(19.8%)でもっとも多く、以下5人以上の都道府県は北海道40人(19.3%)、神奈川県17人(8.2%)、青森県と埼玉県が各14人(6.8%)、千葉県10人(4.8%)、大阪府9人(4.3%)、愛知県と兵庫県が各5人(2.4%)であった(図2)。これらをみると、青函トンネルで結ばれた青森県以外は、三大都市圏からの来訪者が多かったことがわかる。

北海道内から来訪した40人の居住地は、札幌市が15人、函館市が14人、苫小牧市と帯広市が各2人、江別市・千歳市・北広島市・富良野市・旭川市・湧別町・大樹町が各1人であった¹⁷⁾。函館市内在住者を除く26人のうち20人が、道内では比較的人口が密集している札幌市から苫小牧市にかけての地域に住んでいる者であった。また、海外在住の回答者は5人で、国・地域別内訳は台湾が3人、香港が1人、中国が1人であった。

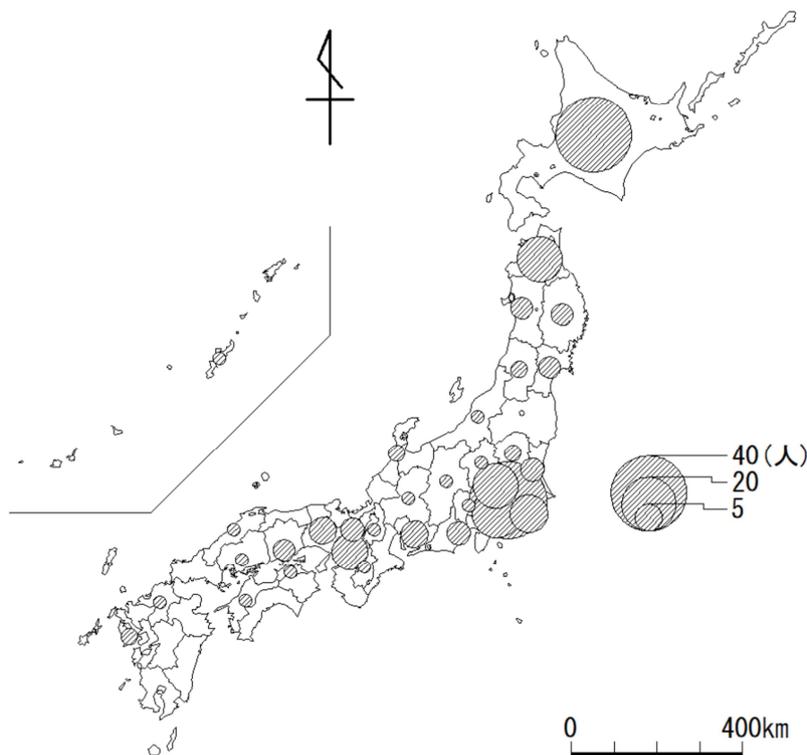


図2 回答者の居住地
(アンケート調査をもとに作成)

3) 函館までの交通手段

回答者が居住地から函館市に入る際に利用した交通手段は、飛行機が 103 人でもっとも多かった。以下は、鉄道 44 人、自家用車 21 人、乗合高速バス 9 人、レンタカー 7 人、観光バス(パックツアー)と船(フェリー等)が各 4 人、観光バス(貸切)とその他が各 1 人で、バイク利用者はいなかった(図 3)。

道内在住の回答者は自家用車が 17 人、乗合高速バスが 7 人、レンタカーが 4 人、鉄道が 3 人、観光バス(パックツアー)が 2 人、その他が 1 人で、飛行機利用者はいなかった。道内から来訪した回答者の半数が居住している札幌市周辺から函館までは、陸上移動で 300km 前後の距離があるが、多くの回答者はバスやレンタカーを含む自動車交通で移動していた。

道外在住の回答者は飛行機 98 人、鉄道 41 人、自家用車と船が各 4 人、レンタカーが 3 人、乗合高速バスと観光バス(貸切)が各 2 人、その他が 1 人であった。外国人 5 人は全員飛行機を利用していった。鉄道利用者 41 人のうち 23 人(青森県 12 人、岩手・秋田・宮城県各 3 人、山形県 2 人)は東北地方在住者であった。一方、飛行機利用者 98 人のうち 85 人(86.7%)は三大都市圏の在住者であった。函館間までの定期航空路線がある空港は羽田、中部、伊丹の 3 空港のみであることが、三大都市圏以外からの航空機利用者が少ない要因と考えられる。

4) 函館市内での移動手段

函館市内での移動手段は、市電 80 人、レンタカー 49 人、路線バス 46 人、自家用車が 20 人、タクシー 14 人、徒歩 13 人、ツアーバス 10 人、定期観光バス 9 人、自転車 5 人、JR が 4 人で、その他(友人・知人の車等)が 9 人であった(複数回答あり、図 4)。これらの結果をみると、レンタカーや自家用車など、車を使って市内観光をする人もいるものの、市電や路線バスが重要な観光の足となっていることが明らかとなった。

タクシーを利用して観光地を巡る人々は、一般的には中高年のグループが多いと考えられるが、今回の調査結果では 20 歳代と 30 歳代が各 2 人、40 歳代が 5 人、50 歳代が 1 人、60 歳代が 4 人であり、同伴者もなし(ひとり旅)からグループまで多岐にわたっていた。

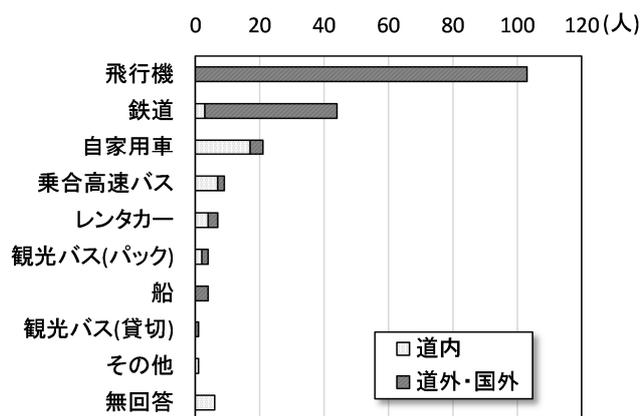


図 3 函館までの交通手段

(アンケート調査をもとに作成)

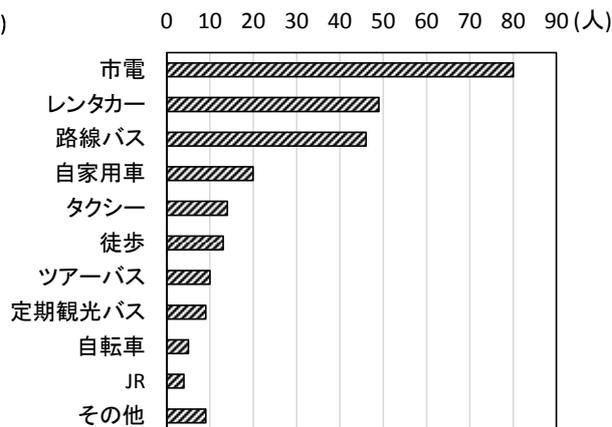


図 4 函館市内での移動手段

(アンケート調査をもとに作成)

5) 来訪回数

函館への来訪回数については、1組の家族や夫婦・カップルのなかで、人によって来訪回数が異なるケース(例：夫が初めて、妻が2回目)といったケースが3例みられた。これらについては各人の回答を1人分とみなしたため、回答総数は203人となった。

結果は、初めてが89人(43.8%)、2回目が39人(19.2%)、3回目が16人(7.9%)、4回以上が44人(21.7%)、無回答が15人(7.4%)であった。函館を初めて訪れた89人のうち、道内在住者は5人、道外在住者は81人、外国人は3人であった。一方、3回目および4回以上来訪した60人のうち道内在住者は14人にすぎず、残る46人は道外在住者であった。道外から3回以上訪れたリピーターが回答総数の4分の1弱を占めていることは、函館が何度も訪れるに値する魅力をもった観光地であることを示唆しているといえよう。

6) 訪れた観光地

回答者が函館市内やその周辺で訪れた観光地をみると、もっとも訪問者が多かったのは赤レンガ倉庫群(金森赤レンガ倉庫)の153人で、回答者の4分の3強が訪れていた(複数回答あり、図5)。以下は、函館山138人、函館朝市119人、五稜郭公園109人、五稜郭タワー98人、ハリストス正教会等(元町教会群)79人、旧函館公会堂59人、湯の川温泉56人、大沼公園39人、外国人墓地18人、トラピスチヌ修道院6人、啄木小公園3人、立待岬2人の順であった(訪問者が1人以下の観光地は省略)。

上位に入ったのは、すべて第Ⅲ章第1節で述べた主要観光地9か所と五稜郭公園を眺められる五稜郭タワーであった。他の観光地は、もっとも訪問者が多かったトラピスチヌ修道院でさえ回答者の3.0%が訪れているに過ぎず、観光客のほとんどが前述した主要観光地以外の観光地を訪れないことが明らかになった。

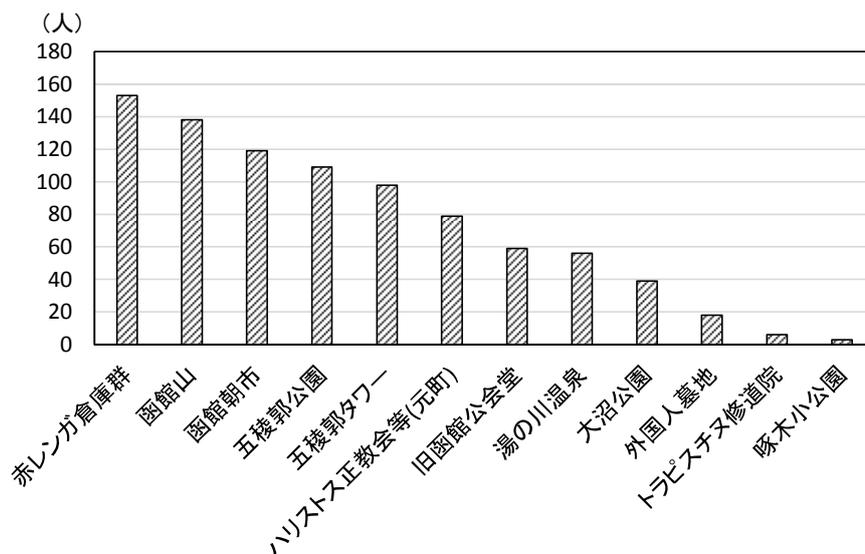


図5 訪れた観光地

(アンケート調査をもとに作成)

7) 宿泊日数

旅行全日程での宿泊日数は、日帰り(宿泊しない)が16人(8.0%)、1泊が49人(24.5%)、2泊が76人(38.0%)、3泊が35人(17.5%)、4泊以上が24人(12.0%)であった(表2)。宿泊した184人が函館市内に宿泊する日数は1泊90人、2泊65人、3泊17人、4泊以上7人で、1~2泊が77.5%を占めていた。日帰りが少ないのは、多くの観光客が函館山の夜景を見に行くためと考えられる。

旅行全日程で函館市内でのみ宿泊する回答者は、1泊が48人、2泊が54人、3泊が14人、4泊以上が6人であった。旅行全日程で函館市内でのみ宿泊する人の割合は、1泊では98.0%、2泊では71.1%であったが、3泊の場合は40.0%、4泊以上の場合は25.0%に低下しており、この点からも3泊目は道内の他地域に移動して宿泊する観光客が多いことがわかる。回答者が巡る観光地が函館市内の主要観光地を駆け足で周遊し、周辺の観光地や市内の小さな観光スポットを時間をかけて巡ろうとしないことが、宿泊日数が増えない要因と考えられる。

一方、函館市以外の地域での宿泊は1泊が30人、2泊が16人、3泊と4泊以上が各8人であった。今回の調査では他地域での具体的な宿泊場所は尋ねなかったが、他地域で4泊以上宿泊する8人のなかには10泊以上する人が3人いた。このうち2人は岡山県と石川県から13泊の日程で来訪しており、どちらも60歳以上の夫婦での旅行であった。北海道の場合は、こうした熟年夫婦の長期型周遊旅行も多いものと考えられる。

8) 市内宿泊者の宿泊情報入手および宿泊予約手段

表3は、函館市内で宿泊した回答者179人から無回答4人を除いた175人が宿泊情報をどのよ

表2 函館市内および道内他地域における宿泊日数

宿泊日数	旅行の全日程(a)		函館市内(b)		道内他地域(c)		函館市内のみ宿泊(d)	全日程函館市内で宿泊する人の割合(d/a)
	人数	比率	人数	比率	人数	比率		
宿泊しない	16	8.0	21	10.5	138	69.0	—	—
1泊	49	24.5	90	45.0	30	15.0	48	98.0
2泊	76	38.0	65	32.5	16	8.0	54	71.1
3泊	35	17.5	17	8.5	8	4.0	14	40.0
4泊以上	24	12.0	7	3.5	8	4.0	6	25.0
合計	200	100.0	200	100.0	200	100.0	122	61.0

単位: 人、%

資料: アンケート調査をもとに作成

表3 市内宿泊者の情報入手手段(複数回答あり)

情報入手手段	回答数(人)
旅行予約サイト(楽天・じゃらん等)	86
旅行会社の店頭	24
宿のホームページ	16
旅行雑誌(るるぶ、まっぷる等)	15
パンフレット	13
観光案内所	7
宿のSNSやブログ	2
口コミや知人の紹介	1
宿泊客のSNSやブログ	1
その他	23

資料: アンケート調査をもとに作成

表4 市内宿泊者の宿泊予約手段

選択肢	回答数(人)	比率(%)
旅行予約サイト	70	39.1
旅行会社の店頭	54	30.2
宿のホームページ	16	8.9
電話で直接	8	4.5
観光協会の紹介	1	0.6
その他	20	11.2
無回答	10	5.6
合計	179	100.0

資料: アンケート調査をもとに作成

うな手段で入手したのかを示したものである(複数回答あり)。これをみると、楽天・じゃらん等の旅行予約サイトが86人と他を大きく引き離しており、以下は旅行会社の店頭24人、宿のホームページ16人、るるぶ、まっぷる等の旅行雑誌15人、パンフレット13人、観光案内所とインターネット(旅行予約サイト以外のサイト)7人、宿のSNSやブログ2人、口コミや知人の紹介と宿泊客のSNSやブログが各1人であった。また、その他のなかには学校(生協等)からの紹介(5人)や、友人・家族の紹介(4人)等の回答があった。またグループや団体旅行で来たため、自分では情報を入手しなかったという回答も目立った。

表4は、函館市内で宿泊した回答者が実際に宿泊施設を予約した際に利用した手段を示したものである。これをみると、旅行予約サイトが70人(39.1%)でもっとも多く、以下は旅行会社の店頭54人(30.2%)、宿のホームページ16人(9.8%)、電話で直接8人(4.5%)、観光協会の紹介1人(0.6%)、その他20人(11.2%)の順であった。

表3、4の結果をあわせてみると、旅行予約サイトで情報入手をした人よりも旅行予約サイトで宿泊予約をした人の数が少なくなっているのに対し、旅行会社の店頭で情報入手をした人よりも旅行会社の店頭で予約した人の数が大幅に増えていることがわかる。詳細にみると、旅行予約サイトで情報入手をした86人のうち64人は宿泊予約も旅行予約サイトで行ったが、9人は旅行会社の店頭で宿泊予約をしていた。また、紙媒体(旅行雑誌、パンフレット)で情報を入手していた28人のうち18人も旅行会社で宿泊予約をしていた。さらに、旅行会社の店頭で宿泊予約をした54人のうち31人は飛行機、13人はJRを利用して道外・国外から函館に来ていた。人気観光地である函館は、旅行会社が道外発でJRや飛行機を利用するパッケージツアーや、ホテルとJRや飛行機とを組み合わせた格安なフリープランを多数設定している。これらのほうが旅行予約サイトを用いた個人予約よりも旅行費用が割安になる場合は、旅行会社の店頭で宿泊予約をするものと考えられる。

9) 函館市に関する感想・要望

函館市に関する感想・要望をフリーアンサー形式で質問したところ、120人からさまざまな回答が寄せられた。このなかでもっとも多かったのは「街の景観がきれい」という感想で、25人が回答した。以下、5人以上から類似した回答があったものは、「食べもの(海鮮、寿司)がおいしい、豊富」21人、「市内交通(バス、市電等)が不便」10人、「夜景がきれい」8人、「寂しい、人通りが少ない、田舎、発展が必要」7人、「市内交通(バス、市電等)が便利」6人、「寒い(とくに朝晩)」5人、「食べ物屋が少ない、閉店が早い」5人、「歴史や文化が感じられる、古い町並みを残して欲しい」5人であった。

街の景観や夜景については「きれい」「歴史や文化が感じられる」といったプラスイメージが多数を占めた。「街がきれい」という回答のなかには、「以前来たときよりもきれいになった」というリピーターからの意見もあった。その一方で、「寂しい、人通りが少ない、田舎、発展が必要」といったように、市街地の衰退を心配する回答もあった。

食についても「おいしい」という回答が多数を占めた反面、店の少なさや閉店時間の早さを指摘する回答もみられた。また、市内交通についても不便という回答と便利という回答がみられた。

以上のように、フリーアンサーでは「街の景観や夜景」「食」「交通」の3点に関して相反する回答が目立った。言い換えれば、これらの3点は函館を訪れる観光客の多くが注目している重要

ポイントであると考えられる。3点について観光客の満足度を上げ、「弱み」を「強み」に変えていくことが観光振興にとって重要な課題となる。

V おわりに

本研究では、北海道新幹線開業前における観光の現況を、函館市を訪れた観光客への対面式アンケート調査をもとに把握、分析した。また、分析結果をもとに函館観光の課題を探った。ここでは、明らかになった課題を整理し、新幹線開業後の観光振興に向けた方策を提案したい。

1) 東北地方からの誘客

今回の調査では東北地方からは比較的多くの観光客が鉄道で来訪していることが明らかになった。その一方で、三大都市圏からの交通アクセスでは飛行機が圧倒的優位に立っていることもわかった。北海道新幹線開通後は三大都市圏からも新幹線で来る客が増えると予想されるが、運賃・新幹線料金は航空会社の割引運賃よりも割高で、所要時間も新幹線のほうが長い。このため、三大都市圏から新幹線で来る観光客は開業ブームが終わると伸び悩む可能性がある。

一方、従来から鉄道に依存している東北各県からのアクセスは、新幹線の開業により大幅に向上するため、東北各県からの鉄道利用客は確実に増えると考えられる。また北東北に来た観光客が新幹線で函館まで容易に足を伸ばせるようになる。東北在住者や東北に来る観光客を函館に呼び込むことが、観光客を増やすうえでもっとも現実的な方策と考えられる。

2) 三大都市圏以外からの誘客

今回の調査では、道外から飛行機で来る観光客の86.7%が三大都市圏在住者であることが明らかになった。これとは裏腹に他の地域から空路で来る観光客の少なさが目立った。道外と函館とを結ぶ航空路線が羽田・中部・伊丹の3空港に限られていることが、三大都市圏以外(東北地方を除く)からの観光客の少なさに結びついているといえる。

三大都市圏以外の地域からの誘客を図るためには、既設路線がある3空港以外の空港と函館とを結ぶ路線を開設して誘客を図ることが有効となる。航空路線を維持するためには双方向の需要を確保する必要があるため、魅力的な観光地が近くにある地域と函館とをLCCやリージョナル・ジェット等の小型機で結ぶことが望ましい。就航の候補地としては、LCCの拠点となっており北関東・南東北の観光客が利用しやすい成田、金沢に近い小松、原爆ドーム等に国内外の観光客が多数訪れる広島、東アジアからの外国人観光客の玄関口となっている福岡などがあげられる。

3) 滞在日数の長期化

今回の調査では、リピーターの多さ、街の景観や夜景に対する評価の高さ等により、函館が高い魅力をもつ観光地であることが改めて認識できた。一方で、観光客が狭い範囲にある有名観光地に集中し、それらを短時間で回ってしまうため、滞在日数が伸びないことも明らかになった。滞在日数の長期化も重要な課題と考えられる。

滞在日数の長期化を図るためには、価値が高いが知名度が低い観光資源を掘り起こして観光客の立ち寄り先を増やすことや、時間をかけて歴史ある街並みを徒歩で散策してもらう観光まち歩きコース、函館をベースにして市内と松前、江差、恵山岬などを周遊する広域観光コースを確立し、観光客に提案することが有効と考えられる。

本稿は、平成 27 年度「専門演習 I」助重雄久ゼミナールで実施した北海道函館市での観光客動向調査(2015 年 9 月 14～15 日)の成果報告に助重が加筆・修正したものである。内容の一部は 2015 年度富山地学会学生発表大会(2016 年 2 月 28 日)にて報告を行った。

注および参考文献

- 1) 函館市公式サイトに掲載された「函館市の概要」による。
(<http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/docs/2014020600063/files/gaiyou.pdf>)
- 2) 「国勢調査」による。2015 年の人口は 2016 年 2 月 26 日に公表された速報値を示した。
- 3) 前掲 2)。
- 4) 函館市(2013) : 『函館市中心市街地活性化計画』 16 ページ。
- 5) 前掲 4) 20 ページ。
- 6) 函館市公式観光情報「はこぶら」(<http://www.hakobura.jp/>)による。
- 7) 函館市文化・スポーツ振興財団 旧函館区公会堂ホームページによる。
(<http://www.zaidan-hakodate.com/koukaido/>)
- 8) 金森赤レンガ倉庫公式ホームページによる。(<http://www.hakodate-kanemori.com/>)
- 9) 函館朝市公式サイトによる。(<http://www.hakodate-asaichi.com/>)
- 10) 前掲 6)。
- 11) 「函館タウンナビ」による。(<http://www.hakonavi.ne.jp/site/course1/goryokaku.html>)
- 12) 湯の川温泉旅館組合公式サイトによる(<http://hakodate-yunokawa.jp/>)。
- 13) 前掲 12)。
- 14) 函館市観光部観光企画課「来函観光入込客数推計」による。
(<http://www.city.hakodate.hokkaido.jp/docs/2015062500021/>)
- 15) 前掲 14)
- 16) 前掲 14)
- 17) 函館市在住者についても、観光目的で市内を散策していた人や、友人などの観光案内をしていた人は対象とした。